
遅咲キ青春歌

氷河雄飛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅咲キ青春歌

【Nコード】

N3615K

【作者名】

氷河雄飛

【あらすじ】

- 時を重ねた分、素直にはなれない心 -
- 知りすぎたからこそ、無邪気にはなれない、深い想い -
- 夢を与える為に、夢を見る時間さえも忘れて -
- 夢を形にしようと、悩み、苦しみ、自分を忘れて -
- 闇を見つけては、笑い、欺く -

トキハ、ビョウドウニオトズレル

タダ、ダレヒトリ、オナジミチヲアユムコトハナイ

ソナ、僕たちノ、遅咲キ青春歌

＜第一章・第一節 - Aパート＞（前書き）

この物語は、フィクションです。

登場する人物、団体などは、実際には存在しておりません。

心の中で、妄想を繰り広げる範囲でのご使用を、おすすめ致します。

<第一章・第一節 - Aパート>

今年、俺は30歳になった。

何事も、大きい事も、小さい事も、些細な事さえも、微塵も感じない、30歳の朝。

一人、狭いアパートの布団の上で、目覚ましのアラームとともに起床した。

そんな、1月の寒い雪の日、俺の変わらない1日が、また始まるうとしていた。

テーブルに並べられた、年賀状の表面。

半分が会社絡み、半分が友達絡み、そして、芸能人の年賀状挨拶。インターネットで、お年玉年賀状の当選を調べ、落胆した自分がふと目をやる先にあった文字。

日向 ひなた 小豆 あずき

中学時代の部活で、一緒だった。

それ以降の接点は、ただこの年賀状ひとつのみ。

何が二人の間にあったわけでもなく、筆まめな彼女と、マメな返信による、かろうじてつながっている、貴薄な関係。

首の皮一枚ならぬ、年賀状一枚のつながり。

中学時代なら、独特の特徴を持つ彼女の名前を、からかう輩もいただろうと、ふふつと微笑んだところで、俺の記憶は終了した。

俺の名は、やまだはるふみ 山田晴史。

0時を過ぎた今、1月29日は、俺の30回目の誕生日だった。

<第一章・第一節 - Aパート>

”三十路”

そう、呼ばれる、オッサンへの入り口に、何の自覚もなく、さっくりと片足を突っ込んだ、雪の朝だった。

けたたましく鳴り響くアラームは、はやりのアニソンが携帯から流れている。

1分おきにスヌーズをセットされたアラームを律儀に止めては2度寝、3度寝を繰り返すうちに、流石に目がさめてきた。

かれこれ、数えて17回目のアラームを止めたところで、俺はある事実に気がついていた。

「……………え」

アラームは確かに止めた、1分ごとにスヌーズされる、アニソンのイントロとともに。

セットはした、間違いなく、音はなっている。

しかしだ。

部屋の時計がおかしい。

10時を指しているようで、それは幻覚のようにも見える。

なんだ、部屋の時計は止まってしまったのか？

秒針の動かないアナログ時計では、今現在、間違いなく時を刻んでいるのかどうか、自分の目では確認出来ない。

ならば、デジタルと通信を利用し、常に正しい時間を導き出してくれる、携帯電話ならどうか？

先程まで、幾多の目覚め争いを繰り広げていた、自分の携帯を、まだ気だるい腕を伸ばし、充電スタンドより取り外す。

画面を表示させるため、通話終了のボタンを、右手の親指で押してみるものの、表示されるのはAM10:03という数字と英語だ。

これは一体どういうことか？

部屋の時計は、10時を指している。

携帯の時間も、10という数字を表示している。

しかしだ、俺は出社していなければいけない時間なのだが、どうしても計算が合わない。

出社にかかる、起床及び出社支度、2つの交通機関を乗り継ぎ、計1時間の道のりがかかる。

出社と同時に、然るべき場所で、然るべきタイムカードという紙つきに、自分の存在を記録し、然るべき席へと着座。

工作上、必須となるPCを起動し、社内ネットワークへと接続して、朝礼の前準備を完了させていなければいけない時間は、

AM8:45

……さて、おかしいじゃないか。

俺は今、自宅にて、布団の中にゆっくりと横たわっている。

そして時間はAM10:00を過ぎている。

と、いう事は、だ。

何か？

俺は、遅刻をしてしまったということか？

なぜ？

なにゆえ？

何故！？

「ばつかやろおおおおお！！！！」

俺自身、いや、俺の体が、まだ睡眠より覚醒したばかりの筋肉が、想像もなかった、

そんなことはどうでもいい。

そう、平たく言えば、通常の俺では考えられない、寝起きのス
ピードで立ち上がり、服を脱ぎ始めていた。

「洒落になってないって！ほんと！なんでこんなことになって
るんだよーーーー！！！！」

セットしたはずのタイマーは、すべて4時間遅れで起動していた。
いつも通りの、スヌーズとの格闘時間こそ変わりはないが、
明らかに総合時間が遅れている。

なぜこうなった！

ぺんぺけ　ぺけけ　つんつん

ひっくり返りそうになりながら、スラックスを履いている俺の耳に、こんな時に聞きたくはない、間延びした曲が、鼓膜へと振動を伝える。

そう、それはまるで、日曜日の夕方、視聴者の笑いをさらう番組から流れるであろう、ある意味ノリのよい、間延びしたテーマだった。

「やあゝまあゝずあゝきいゝかああああ！」

この、どうしようもなく、どうしようもない時間に、なぜどうしようもないメールが届き、どうしようもない音楽が、鼓膜を叩かなくてはならないのか！

急がなくてはならない、この限られた、といつてもすでに時遅しといった感じの時刻だが、被害を最小限にするためには、行動をしなくてはならない。

その為には、どうしても、この耳障りな音を止めなくてはならない。

我慢すればいいことなのだが、どうしても、気がちってしまっ

「ええい！　ままよ！」

半履きのスラックスのまま、騒音の発信源へと手に伸ばし、携帯電話のセンターキーを、荒々しい指の動作で押し込む。

『今日の休みは…』

表示されたのは、山崎の名前と、件名。

「何を馬鹿な事をいつている！ このやまざきめが……………が？」

『今日の休みは…』

なんだ、この”休み”という単語は。

これはどこの国の言葉であり、一体、どういう意味を持っているのだろうか。

そして、この、文章のはじめについている、時を表す”今日”とは、更に何を示しているのか。

”今日”という言葉と”休み”という言葉のつながり。

これに関して、俺は山崎へ、400字詰め原稿用紙に、余す事なく、説明を書かせなければいけないのだろうか。

半分キレ気味、それでいて混乱している頭で、俺は更に携帯電話のキーを、荒々しく押していた。

『先輩は、今日の休み、何か用事があるんですか？』

「今日は忙しいって………休み、だと？」

どういう事だろう、このメールの意味は。

”休み”？

それは美味しいのか？

というか、なんだ、休みとは。

さて、落ち着けよ？ 俺。

今の格好↓上半身マツパ、下半身中途半端な姿

今の時間↓AM10:05

今日の日付↓1月29日 日曜日

部屋にあるものを見渡して、今現状、俺自身が認知出来る情報で、得られた答えはこの3つだ。

これに、山崎の情報を照合すると……

「今日……俺、休み、なんじゃ……ないか？」

考えても、考えても、今、何故俺がこんなに急いでいるのか。

その理由が、もたらされる情報によって、次から次へと覆されている。

「ちょ……俺、何やってんだよっ!!」

寝ぼけた俺が、ただ単に、一人で焦っていたという事に気がついた時には、すでに起床から10分を過ぎていたのだった。

< 第一楽章・第一節 - Aパート > (後書き)

はじめまして、氷河雄飛と申します。

文章から離れて、早2年。

すっかり文章の書き方を忘れてしまっておりま……

りハビリの為の作品ですので、どうぞ、カレイにスルーをお願いいたします。

< 第一章・第一節 - Bパート >

AM 11:21

ー 秋葉原・昭和通り口 ー

先程、山崎から届いたメールは、混乱した俺に、一つの道標をつけてくれた。

そう、休日の予定、だ。

普段であれば、休みの日は昼までゆっくりと惰眠を貪り、午後起床。

不健康な食事、不健康な生活環境のまま、さらに不健康のスパイラルへと導かれるだろう、

TV

ゲーム

漫画

ごろ寝

この欲求だけを追い求めるような、不健康極まりない休日の過ごし方こそ、自分らしく、自分を保つための行動なのだ。

それがどうしてか。

俺は珍しく、お天道様の下で、ほんわかポカポカと、日向ぼっこをしてみているではないか。

……これは、とても健康的な行動をしているのではないか？

……そして、とてもまともな、一般人らしい、お出かけをしているのではないか？

山崎よ、俺の為に気を使ってくれて、外へと導いてくれたんだな！

ありがとう、山崎よ！

「……なんて、言うわけがないってえの！」

「え？ 何がですか？ 先輩」

まずいまずい、思わず心の中の言葉が、脳から肺へ空気を送る指令をだし、気管を通って、声帯へと働きかけてしまっていた。

口は災いの元、なんて言葉がある通り、考え事をしているときは、無意識にでも、口を手で押さえておいて欲しいものだ。

「いやあ、先輩なら、何か安いお店でも知ってるんじゃないかなって、ふと思っちゃいました」

「……まあ、知ってると言えば知っているし、知らないと言えば知らないわけだが……」

「まあたまた、ご謙遜ご謙遜。先輩の事、頼りにしてるんですからねっ！ 特に、こういう事に関しては！」

「頼りにされるのはありがたいが……この場に関する情報と、俺の存在というのが即・リンクしている、というのは、いかなものか……」

一昔前の秋葉原では、あまりお見かけしなかっただろう”今風”の若者。

昨今の秋葉原では、特に珍しくもない、彼らのような”非・オタ”な人間。

そんな、だれが見ても”イケメン”という言葉で、とりあえずは全体図を理解出来るといった感じの風貌の彼。

”山崎^{やまざき} 天明^{てんめい}”は、自分が働く会社に出向している、派遣社員だった。

同じ営業部に配属され、俺の下で部下として働いてくれている彼は、今年24歳の若者だ。

24歳でも、若者と思ってしまった俺は、明らかに年齢を意識し始めている、そんな現実が、少し心を締め付ける感じがしないでもなかった。

「で、今日は何をご所望なんだい？ 山崎くん」

「ちょうど、ウチのTVが壊れちゃったんで、2011年を目前に控えた今っ！ 液晶TVを買っちゃおうかなあ〜って」

「ほほう。随分と気前の良い事いっちゃって……さては、大型の買うつもりか？」

「いええ〜っす！ こことは、ドローンと40インチ位を狙おうかと！」

自分の手を大きく広げて、このサイズだと言わんばかりに、体を動かす山崎。

俺よりも背丈のある、細身だが、しっかりと筋肉の着いた腕を多うジャケットとインナーは、黒で統一されている。

ぴったりと、体系にあった皮のジャケットは、山崎の顔も引き立たせる。

無造作ヘアー、というものののだろうか。

顎に生やした薄髭と、黒に染められ、セットした髪型だけを見ていれば、まさに今風の若い子に違いはない。

ごく平凡な自分の格好と並んで歩かれると、ちょっと気が引けてしまふのは、小心者故の気苦労なのだろうか。

ニコニコと笑を浮かべ、楽しそうに話す山崎とは反面に、すこしテンションが下がりつつある俺が、今そこにいた。

「今はまだ、液晶を購入するには、時期尚早、といった感じなんだけど、構わないのか？」

まだまだ、家電製品の開発・販売ラッシュの続く今、俺の本音としては、山崎にはもう少し待った方がいい。

そう、言いたい気持ちで一杯なのだが、その意見は、どうにも口に出せない、そんなイケイケなオーラが、山崎から溢れているのがわかる。

「いいんですよ！ 今だから”買い”なんです！」

「うーん……山崎が、何をもってそういう考えに至ったかはわからないけど」

考える時、思わずしてしまう癖。

顎に右手を添ながらも、山崎の意見を汲み取らなきゃなど、本音と気持ちをぶつけ合う。

「うーん……」

「だめっすかねえ？」

「いや、わかった。山崎がそのつもりなら、俺も出来る限りのアドバイスをしようじゃないか！」

「さあっすが先輩っ！ 頼りになりました！」

「そうと決まったら、何軒か回って、市場捜査からだな」

「りょうつかいっ」

「あ、この手伝いの分は、明日の昼飯、奢ってもらうからな」

ゲツ、と、言わんばかりの顔で、俺を見る山崎に、俺は悪意を持った笑みで応戦する。

悪意といっても、あくまでも冗談のつもりなのは、お互い承知の上だ。

意思疎通の図りやすい、山崎となら、多少キツイ会話でも、上手くキャッチボールをすることが出来るのだ。

―― 約2時間後・PM13:25 ――

「……ぜーんばあーい……」

「どーしたー、やあまあざあきい〜?」

明らかに”疲れた”と言わんばかりの表情をした山崎に、ニンマリ
の微笑みかける。

こちらら、伊達に秋葉原に詳しくなつたわけではないのだ、と言わ
んばかりに、えっへんと胸をはりながら、山崎の相手をする。

「そろ……そろ、飯にしましょうよお、メシい」

「つとに、最近の若いもんと来たら……」

「先輩、それ、すっごいオヤジ臭いです」

「そこだけ真顔で、元気につっこむな!」

山崎、それはだめだぞ、禁句だ。

飯にも”三十路”という、一つの称号を手に入れたしまった俺とし
ては、その類の洒落は、洒落にならん。

もう少して、心の一部を、削ぎ落とされてしまう処だった。

「んまあ、確かに昼飯のピークも過ぎた頃だし、ここいらで一服入
れようか」

「ぜひっ! ぜひそうしましょう!」

「わーったわーった、そう急かすなって」

メシという言葉に反応し、犬なら尻尾を勢いよく振っているだろう、

山崎の表情を見ると、なんとも言えない笑いがこみ上げてくる。若いつてのは、素直でいいもんだね。

「んじゃあ、俺のおすすめのカレーなんてどうだい？」

「俺、秋葉原の事さっぱりわからないんで、先輩におまかせしますよ。」

「おーけー、なら話は早い。早速向かうぞ、山崎！」

「らっじゃっ！」

そして俺たちは、空腹感で支配され、徐々に重さを感じるようになった体を懸命に動かし、目的地へと進路をとった。

―― 10分後・PM13:35 ――

「お店はーっと……よし、やってるやってる」

「このお店っすか？」

「ん、この店だ」

このベトナム風チキンカレー、これがまた絶品なんだよなあ。

……って、想像しただけで、ヨダレが出てきちまつたい。

「いいか山崎、この店で頼むメニューは一択だ」

「はいっ？」

『ベトナム風チキンカレー』

「え？」

「えっ？」

俺がメニューを口にしたとき、ちょうど向かい合う方向から来た人たちと、声が被ったみたいだ。
思わず、被った事に驚き、声をだしてしまった。

じつと見た訳ではないが、明らかに女性二人。
身長の高い方と、低い方。

その低い、ちょっと可愛気のある女性が、ぼかーんとした表情で、俺を見ている。

…… たぶん、この人とかぶっちゃったんだろうな、メニューの言葉。

「いやあ、あはは……すみません」

思わず頭をポリポリとしながら、笑って誤魔化してる俺、とっても気まずい。

山崎と、背の高い女性は、何？ といった表情で、お互いの連れを見ている。

……もしかして、気まずいのって、俺だけだったのかな。

「お、お先にどうぞー」

「えっ……」

あまり大きくない、店の前で同じお客として鉢合わせたなら、女性に譲るのが、男として当然の行為かと。

そう思って、発した言葉は、どうにもぎこちないものだったが……
ちゃんと伝わってくれているのだろうか、コレ。

「晴史くん？」

「はい、どうしました………ん??」

俺、今なんで答えたんだ？

この背の低い女性、もしかして、俺の名前を呼んだ？

それとも、読んだ？

この一言二言、会話しただけで読まれちゃった？

いやいやいや、ないないない。

ちょっと冷静に考えてみようや、自分さんよ。

そもそも、世の中にはどれだけの名前が存在している？

日本国内だけでも、一体どれだけの名前が存在しているっていうんだ。

その中から、ピンポイントで、山勘で当てられるほど、俺の名前は多いはずはない。

じゃあ……なんで俺の名前を？

「やっぱり、晴史くんだったんだあっ！」

「えっと……どちら、様だっけ？」

あの……俺の頭脳に、該当される方が、検索されないのですが。

UNKNOWN

ERROR

該当者は発見出来ませんでした。

ほら、俺の脳内検索がエラー履いちゃってるよ。

「あ、そっか……じゃあ……亜紀、ちょっとメガネ貸してっ」

「へっ？ アタシのメガネどうすんのさ？」

「いいからいいから、ちょっとだけだからあゝ」

「貸すのはいいんだけどさ……っと、ほら」

「へへへっ、ありがとっ！」

のほほんと進む会話。

手渡されるメガネ。

背の低い方の女性が、徐に長い髪をかき分け、メガネをゆつくりとかける。

！！！！A P P L I C A B L E！！！！

ちよつとまで、俺の脳内検索が、何かを見つけたぞ！

そうだな、情報を遡ること……今からかれこれ15年前位。
つてことは、俺がまだ中学の……

「小豆？」

「へへっ、せいかい♪」

メガネの縁をつかんだ、小豆と肯定した彼女は、悪戯気な表情に、
につこりと微笑んだ。

伴奏パート

「ねえねえ、亜紀」

「ん〜？」

東京では珍しい、雪を観察した日の昼下がり。

大学時代からの親友同士である、小豆と亜紀^{あき}は、ここ、秋葉原にいた。

「なんでまた、今日は秋葉原なんかに来たの？」

「ああ、ゴメン、理由言うのすつかりわすれちった！」

アハハと、別に大した事がない。

そう取れるようなサバサバとした亜紀の態度は、いつもの事だった。

小豆にとっても、亜紀のこういった日常のサクツとしたやり取りが好きで、今の付き合いがあった。

表向きにはサバサバとしていても、ちゃんと考えてくれる、優しい一面も持ち合わせているからだ。

「秋葉原に来たのはさ、とあるサイン会の会場視察、って感じかな」
「サイン会？」

「ああ、サイン会。とある作家さんのね」

「へえ……サイン会かあ……」

自分には縁のない言葉。

そんな表情で思案に更ける小豆の顔を、長身の彼女は、屈み格好で見つめた。

身長は170cmはあるだろう、女性としてはそれなりに高い方になるだろう、亜紀は、見た目からもわかるように、活発そのもの。ボブカットの髪型に、綺麗という言葉が当に適當だろうといえる、整った顔立ち。

隣に並ぶ小豆とは、対照的な女性像だった。

「あんだだよ、あゝずきつ」

「あずきって作家さんのサイン会かあ……ふーん……えっ？」

「ちよつとちよつと、小豆なんて名前の作家、あんたくらいしかないっしょっ！」

「えっ？ 何っ？ ちよ、ちよつとまつて！？」

背丈は150cm位だろう。

亜紀より遙かに小さな体を、ワタワタキョロキョロと慌てふためかせ、明らかに拳動不審な小豆。

腰まである、長く綺麗なストレートの髪が、キョロキョロとする度に、ふわりと風になびく。

身長から想像できてしまうような、その童顔は、未だに高校生にでも間違われてしまうのではないか。

そんな、あどけなさを残す自分に、三十路という言葉を重ねながら、亜紀に愚痴をこぼすことも、しばしばあったりした。

そんな可愛げのある小豆の様子を、わが子を見る母親のような表情で、微笑ながら、亜紀は言葉を続けた。

「前回、あんたがウチの出版社から出した絵本、ちよつとクチコミで話題になってるのよ」

「ぜ、前回のつて……あの、えと、『闇と光の輪舞曲』？」
やみとひかりのろんど

「そつ。あれさあ、今までの方向とはちよつとちがつて、大人もターゲットに入れた絵本だったじゃん？」

「うん……ちよつと、違う方向も模索してもいいかなっておもって……」

本の名前を出されて、今まで慌てふためいていた小豆の動きが、ピタリとやんだ。

自分に舞い降りた、初めてのサイン会という言葉も、この絵本名で、小豆の表情に陰りを落とした。

「アタシだつてさ、あんたが子供に向けて絵本を描きたいって気持ちさはさ、わかるんだよ」

「うん……」

「でもさ、何時までも同じ場所に立ってるワケにはいかないじゃん」
若干だが、表情を曇らせる小豆の頭に、ぽんと手を添え、優しくな
でる亜紀。

大学時代からの付き合いだからこそ、わかる友人の心境変化に、し
っかりと対応していた。

「実際さ、今回、子供意外の部分でウケてくれてさ、いい宣伝にな
ったと思うんだ」

「うん……」

「小豆、いい方向に考えてみなよ。絵本作家ってさ、結構いっぱい
いるってこと、わかるよね？」

「それは……わかってるよ」

「それがわかってるなら、本がなんで売れるかって事も、しっかり
理解してるよね？」

「うん……」

「今回の『闇と光の輪舞曲』。これが売れてくれたおかげでさ、新
たな販売チャンネルを開拓出来たんだよ？」

「……………」

「絵本作家としての名前も売れば、誰かがさ、気がついてくれる
じゃん」

更に表情の暗くなる小豆の、腰まである長いストレートの髪をゆっ
くりと撫でながら、そっと亜紀は、胸を貸した。

「亜紀……」

「アタシは、編集担当になったときに、小豆に言ったよね？ 一緒
に夢に向かおうって」

「うん……ちゃんと覚えてる」

「今回、アンタの本意じゃなかったのは、よくわかってる。でもね、
もう一つ。先に一緒に行きたかったんだ」

胸を貸す、小豆の小さな体を、包み込むように抱擁する。

「だから、今回の絵本で、世の中の人に、小豆の名前が浸透したっ
て事、とってもうれしく思ってるんだ」

優しい声で、諭すように、無理に言いくるめずに、亜紀は続ける。

「今回のサイン会、アンタにとって、とっても重要なステップアップの一つになるよう、アタシが取り付けてきたんだからさっ」

「ごめんね、亜紀が頑張ってくれてるの、よくわかってるのに……」

「いいんだよ、小豆。ちょっと今回はアタシも、無理を押し通させてもらったしね……でもね、ちゃんと朗報もあるんだから！」

「へっ……？」

しよほんと、まるで怯えた小動物のような表情をした小豆が、『朗報』という言葉に反応したのか、ゆっくりと亜紀の顔をのぞき込んだ。

「アンタの絵本がね、ウチの会社に広告を出してくれる、某会社の営業さんの目にとまってねえ」

覗き込む小豆に、ニヤリと不敵に微笑する亜紀は、さらに続けた。

「その会社で出す製品のイメージキャラ、描いてみない？　って、話があつたのさ！」

「えっ……！」

「しいくかゝも」

人差し指をたて、言葉にリンクさせ、ゆっくりと言葉を放つ亜紀を、じつと見つめる小豆。

そこには、さっきまでの落胆した表情はなく、自分とは縁の内容な言葉のオンパレードに、若干混乱気味といった感じた。

「子供向けの商品ブランドなんだよっ！」

「……！」

「アンタが悩んで、悩んで、悩みまくっても、作品を仕上げたご褒美だよっ！」

「あ、亜紀ちゃん！」

「本当はサイン会場まで行ってから、事の経緯を話そうと思ったんだけどさ……ごめんな」

「あ、謝らないでっ！」

「ほんと、頑張ったよ小豆っ！」

「亜紀ちゃん、あ、ありがとう……っ」

道端で一体何をしてるんだ？

そんな奇異な目で見られる光景なのはたしかだが、ここは秋葉原。皆、自分の目的へと向かってまっしぐら。

そんな中では、対して注目を集める事もなく、中のいい友達同士と、思われているだろう。

「で、今回のサイン会ってのは、ウチの会社でお世話になってる書店サンでさ、小豆のファンだって人がいてさ、

お店で販促サイン会、もしよかったら開けないかって、お話があったんだよ」

「そ、それで秋葉原に？」

「そういうことっ。小豆に相談もなしに、サイン会なんて話、進めちゃって悪いかなって、思ってたからさ……一度、お店みてもらって……」

「悪いなんて、ないっ！ 全然ないからっ！ ありがとう、亜紀ちゃん……！」

「ちゃんと、アンタの事考えて、先に進めるようにって、後押しするのがアタシの役目だかんねえ」

「そういう、亜紀のポジティブなところ、ちゃんとわかってるよ」

一度落ちかけた気持ちを持ち上げられ、想像し得なかった状況の津波に、小豆の瞳はうるつと来ている。

こっいう、気持ちの持ち上げ方も、亜紀はしっかりと心得ているのだろう。

しかし、この屈託のない笑みを浮かべる小豆の表情には、免疫が出来るわけもなく、もらい泣きをしかけている亜紀いた。

「ま、まあ、あれだっ……と、とりあえずゴハン食べに行こうよ」

「あー、亜紀ったらなんかはぐらかしてない？」

「ち、ちがうったらっ！」

ずびつと鼻をすすった亜紀は、思わず空へと視線をうつした。

彼女なりの、照れ隠しだ。

「そ、そうだ。この間、書店さんとの打ち合わせの時に、美味しいお店みつけたんだよ」

「亜紀が見つけてきたお店なら、間違いないっ！そこにいこっ？」

「よっし、了解っ！先にゴハン食べちゃってから、書店さんの下見にいこっか」

「うん」

すっかり、機嫌のよくなった小豆と、ちょっと照れ気味の亜紀は、その足取りを、お昼のランチへと向かわせていたのだった。

その行先で、小豆と晴史はるふみの、青春歌の前奏が始まると、その時はまだわからずに。

伴奏パート（後書き）

添削など、まだ全然していません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615k/>

遅咲キ青春歌

2011年1月18日20時39分発行